

やり直しのできる社会を！

新宿連絡会NEWS

2007.2.10

VOL. 45

新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議

〒169-0075東京都新宿区高田馬場2-6-10

関ビル106号 NPO新宿気付

TEL.090-3818-3450 FAX.03-3373-9878

<http://www.tokyohomeless.com>

年があけて

笠井和明

2007年になり、相も変わらず格差がどうの、ニートがどうの、貧困がどうのの議論が続いている。貧困と一括りにしまえば、ホームレス支援も面目躍如、いかにも経験者ぶって、最近流行のニート問題とホームレス問題を無理矢理大きな政治用語で結びつけ、偉そうな顔ができる時代になったようだ。

路上の人々を路上の人々として固定したまま新たな問題に飛びつくなど、私などは口酸っぱく云うておるのであるが、浮気癖と云うのはもはや国民性のようで、あっち行ったり、こっち行ったりとこの業界も忙しいようである。

最近とある人から「連絡会を研究課題にして博士号を取った人物がいるが、承知しているか？」と聞かれた。名前は北川由紀彦と云う者らしい。この人物、最近



第13次新宿越冬 毎日600食の昼飯、晩飯を提供

ホームレス支援業界でも有名になりつつある「若手学者」であるらしい。私も顔は存じておるが、正式にきちんとお話した事もないし、また議論もした事もない。またそ

んな論文も作成されていることも知らず、連絡会として正式に研究対象として申し入れられた記憶もない。よく学生さんが研究課題として連絡会活動を取り上げるようであるが、たいがい、稚拙ながらもまとめたものは礼儀として送ってくれたりするものであるが。

そのとある人はそんな関係に驚き、早速その博士号を取ったと云う論文を取り寄せてくれた。勝手に対象にされ、大変光栄なものと拝見したが、まあ社会学と云うものは三流マスコミと同じようで、こんなもので博士号が取れるのならそこいらにいるフリーライターさんでも博士になれると云う代物であった。ご丁寧に連絡会の経緯をいかにも自分が見て来たかのように綴り、最後に連絡会はすべての野宿者を代表していないと、これまた当たり前の事を、さも学者らしく強調して「新宿兄弟会」の例まで出して論じているのは大笑いであった。私はかつて「兄弟会」の名誉顧問にしてくれと、その仲間に云うて、親しき関係を築いて来た事など、この筆者は知る由もない。表層だけの取材はこの学者先生に限らず、三流マスコミ特有のものであろう。

連絡会など単なる運動団体に過ぎない。多少ネームバリューがあるからと言って、連絡会の変遷を追ったとしても、自身は博士号を取得し食い扶持は得られたとしても、それだけではホームレス問題の解決には何も繋がらない。

こういう学者や政治がかったおかしな活動家が、単純な問題をわざと複雑化し、自らの「食い扶持」や「活動拠点」にしがみつき、結局はよくある社会福祉法人と同様に、解決できるものをわざと解決困難にさせている「業」を、誰しもが自覚しない。

ホームレスをホームレスの烙印を押したまま、社会復帰させようとする無謀な挑戦はある種の論理矛盾を抱えている。逆に言えば、ホームレスと云う存在は状態を指しているだけの概念であると云う事を忘れ、何かホームレスと云う階層がいるかのように論じ、「嗚呼、可哀想」と同情だけを押し付ける手法、逆にホームレスと云う主体性だけを論じ「嗚呼、戦うぞ」と「当事者主義」を押し付ける手法、いずれもすでに破綻している事に、誰も気づこうとしない。良い例がマスコミであり、未だ「ホームレスVS行政」と云う構図で物事を切り抜こうとし、行政批判のネタにしているだけである。

そもそもが、ホームレスと云う状態こそが、健全な社会、民主的な社会と考える場合に問題なのであり、それは単に行政施策だけの問題ではなく、社会全体でかかわるべき課題であるとする問題意識そのものが希薄になり、支援団体が支援していれば良い、行政がもっとまともに施策を行ってあげれば良いと、「他人の」問題にしている事こそが、最大の問題なのである。このレベルはもはや啓発啓蒙の問題ではなく、社会の「感性」の問題であると、最近つくづく考えるようになった。それを言っちゃあおしまいよと、人は云うのであるが、路上からの現状を路上の視点から見、また施策の現状を事業者の立場から見、そして社会の動向や視線をさまざまな角度から見続けると、年々そう確信めいたものが知らずと湧いてくるのである。

制度、政策はもちろんしっかりと吟味していかなければならない課題であり、ある意味社会を規定していくものである事は確かな事ではと思うが、他方で「感性」と云うものは、それをも包摂してしまう社会の根幹であるように思うのである。これは文化伝統であるとか、教育（学校教育だけの意味ではない）の問題であり、非常にやっかいなものなので



都庁の真下に越冬用のテントが広がり、仲間が集う。

あるが、少なくとも私の知る日本の文化にホームレス状態を放置しておく「感性」などないと思うし、そう願うのであるが、残念ながら支援団体が強固に主張しないと施策すらしない現実がある。施策の動機はどうあれ、夜露の中で人が暮らす事への、良い意味での「同情」の「感性」はかつては、そこに必ずあったのであるが、今や同じ同胞に対してそれすら感じられぬとは、本当の不思議である。これを突き詰めれば愚痴にしかならないが、しかし、学者として食い扶持を得たる者は表層の事柄を三流マスコミ宜しく追いかけてこう云う問題をつきつめて欲しいものではある。かの北川なにかしも、私に正式に取材を申し込み、時間が取れるのであれば、こう云う問題をしっかりと議論したであろうが。

世は格差がどうのこうのと、分かり切った事をさぞかし新たな問題のように論じている。そこから先は政治の問題で、安倍首相が云う格差が問題でなく、再チャレンジできない事こそが問題である、と云う新自由主義的な論旨も分からなくはない。また、大きくなった格差を是正すべき、と云う社会民主主義的な論旨も分からなくはない。しかし、その前にホームレス状態で放置している今日の現実と云うものを直視してもらいたい。格差をめぐる議論は、せめてホームレス状態を是正してこそ論じられる課題であると、皮肉ぶって言えば、そうなのがある。

ホームレス問題は一般的な貧困問題とは一線を画してしまう問題であると思う。それは、まさに目に見えるが故の問題であり、それ故、治安であるとか、都市景観であるとか、都市開発であるとか、本来の福祉とは別の見方で対処もされるからである。その意味で福祉一般ではなく、特殊な貧困形態である事は誰もが分かると思う。

特殊であるが故に、一気にそして大規模に施策は打てる筈であり、だからこそ、時限立法の法制度化が可能であったと考える。法的に言えば、あと5年しかないが、あと5年で決着させると云う気概はどの自治体を見ても希薄である。あらゆる施策に努力目標と云うものは今日ついているものであるが、ことホームレス問題で言えば、どの自治体も何年間で何人の自立を目指し、そのため具体的な施策を打つと云う具体性は皆無である。中には「ゼロ計画」を打ち出した自治体も東京にはあるが、そのために何をするかは何も明示せずかけ声だけで「ゼロ計画」を云うているに過ぎない。これでは東京は駄目になる一方である。もはやホームレス問題を解決できないようでは、まともな都市とは云えず、そうなればオリンピックどころではない。

鳴り物入りで開始された地域生活移行支援事業も、紋切り型の成果主義が導入され、何人が就労自立出来たかしか、その評価基準を持たずに、低家賃住宅施策の重要性など、どの役人も頭の外に追いやっている。かの北川なながしも係っているようだが、支援団体と云う連中も、重箱の隅をつつくような民事訴訟を行い、さも施策に問題があるかのよう演出し、三流マスコミはそれに追随する。路上脱却を目的とした施策は問題があろうと良い施策である。民間の資金力では限りがある以上、路上脱却を目的にした施策は褒めちぎって、伸ばし切り、利用し尽くすのが、今やこの世界の正常な路線であると考えるのであるが、食い扶持や政治利用の対象者がいなくなるのが嫌なのか、そうは考えないのが世の不条理である。それが故に路上脱却の施策を運動の総括をかけ実践している連絡会を陰で誹謗中傷し、陥れようと手ぐすね引いて待っている。数年前から同じような事を云うておるが、これが我が運動側のお粗末な現状である。

それでも時は刻み、2007年となった。相も変わらず500名近い仲間が新宿の街で越年をせざるを得なかった。400名近い仲間が金もなく食い扶持もなく越年の炊き出しの世話になった。炬燵でみかんを食いながらではなく、寒風吹く中、毛布を背に震えながら紅白を見、年越しそばで身体を暖め、常盤寺の除夜の鐘を皆で聴いた。毎年同じ事を言っている。「紅白は炬燵でみかんを食いながら見るものである。来年こそはそう云う生活を取り戻そう」と。しかし、それがなかなか叶わない路上の現実。幸いにして路上から脱却し、かつての仲間を心配しボランティアに来た仲間は口々に云う「どうにかならないもんか?」と。何も夢は求めない。かつがつでも雨露凌げる宿があり、安くても仕事がそこそこありの生活。当たり前の、普通の暮らし。仕事帰りに安い発泡酒でも飲み、仕事の愚痴を云い、二日酔いの顔を洗い、洗い毎朝職場に行ける生活。この普通こそが、鬼門になっている大きな壁。それすらさせてくれない、そこに至るまで背中を押してもらえない施策の狭さ。越年はしみじみと、この世界の現実を考えさせられる。「仕事があるではないか」世間ではそう云う。確かに東京では仕事はある。求人誌にも、折り込みチラシにも仕事はある。けれど、ホームレスの俵では誰しも使ってはくれない。これはもうどうしようもない現実である。雇い主は立場上信用を求める。せめて自分のアパートがあり、連絡先があるのが労働者として当たり前の姿であり、ホームレス状態を理解せよと云うてもそれは無理が

ある。ならばと私たちが要求し、実現させた自立支援センターがあり(ワーキングプアにならないようにと技能講習もあり)、地域生活移行支援事業があるのであるが、残念ながら路上のすべての人を包摂できるほど懐は深くない。路上脱却と就労可能層の就労支援策は既に確立していると云うのに、それはいつまで経っても拡大されずにいる。既にそのノウハウを持った事業体が複数存在し、手ぐすね引いて待ってはいるのに、利用者がやって来ない。もっとやらせてはくれない。これは実にもったいない事である。

炊き出しや越年事業など、本来ならば必要がないのであるが、あたかもそれが当たり前かのように行政も考えてしまっている。これぞ、体の良い構造化であり、共犯関係である。

98年以来、私たちは「泣きながら進んで来た」が、未だ「泣きながら」見えない敵とたたかい続けている。あの時亡くした4名の仲間にも未だ笑いながら報告が出来ない事が、私たちが背負い続けている十字架である。ホームレスをホームレスのまま固定化させて来た負い目は、学者どものくだらない評価を超越し、私たちの眼に今も刻まれている。

また、炊き出しを続けている。パトロールをひっそりと続けている。福祉行動も医療相談も細々と続けている。せめて路上で死なぬよう。せめて、今ある狭い施策に乗れるよう。連絡会とはこういう事しか出来ない団体である。

了

(2・7火災 10回忌を前にした夜、新宿で記す)



衣類、毛布の無料提供。越冬期間で1000枚の毛布が手渡される。

第13回パトロール班報告

上釜 一郎

■ はじめに

新宿連絡会は06年12月29日～07年1月4日の期間、第13回越年闘争を行いました。今回は新宿中央公園「ポケットパーク」が工事中のため拠点を同公園「水の広場」に移し、そこで炊き出し班が食事、医療班が医療を提供する一方パトロール班は公園や駅周辺で過ごすホームレス状態の方々にアウトリーチを行い情報提供と安否確認を中心にアプローチしました。

今回の越年もホームレス状態の方の属性によって異なる就寝する時間帯と場所に対応してパトロールを3部構成で行いました。

1次パトロール（20時～22時過ぎの間）では、正月休みで営業していない店舗の軒下や公共施設（公園や図書館など）で比較的早い時間から就寝できる方。地下街や地下鉄の地上への連絡口の内側で暖をとっている方などにアプローチしました。

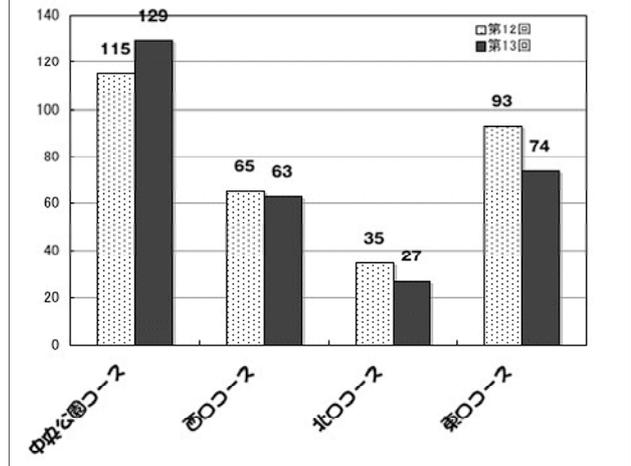
2次パトロール（23時～24時過ぎの間）では、1次パトロールの地域に安定した就寝場所を持たず、22時以降4号街路（地下通路）の飲食店などの前に就寝する方。23時以降新宿駅西口地下のA15番（地下通路の連絡口）シャッター閉鎖後に新宿駅西口の地下広場に就寝する方にアプローチしました。

3次パトロール（25時～26時の間）では、終電後のシャッターの閉まった駅舎の軒下で就寝する方や営業が終了しシャッターの降りた地下街や地下鉄の連絡口の階段（シャッターの外側）に就寝する方。昼夜逆転の生活をして夜間は寒さを凌ぐために歩き続けて（流動して）いる方などにアプローチしました。

■ 人数の推移

越年期1次パトロールのコース別平均人数を第12回と比較すると、中央公園コース以外は若干減少傾向でした。3コースの減少は行政や民間の管理者による通年的な排除が、中央公園コースの増加は今回の拠点である「水の広場」が前回の「ポケットパーク」と比較して面積が広いことや天候に恵まれたため越年期間中のみ臨時で拠点周辺に寝泊りするホームレス状態の方が例年以上に増加したことが原因

1次パトロールのコース別平均人数の比較

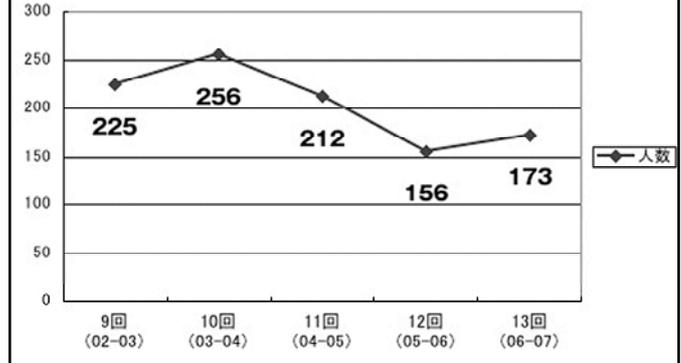


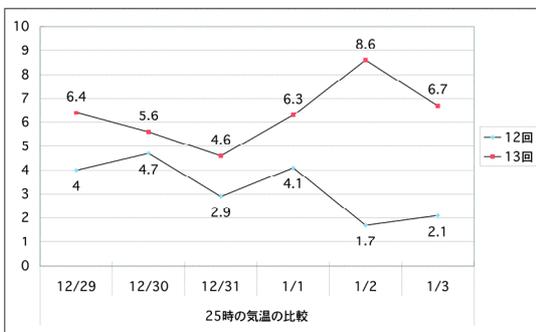
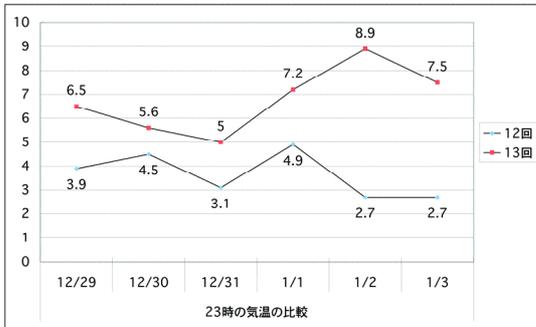
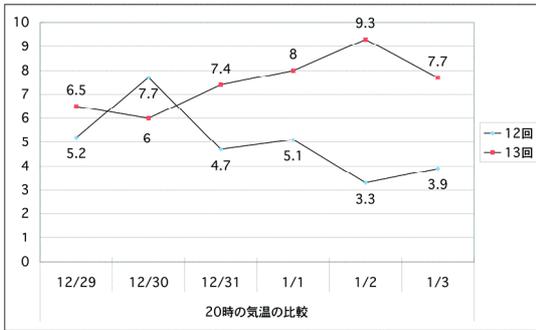
のひとつだと考えられます。

越年期2次パトロールの平均人数を過去5回と比較すると、10回を増加のピークにして以降12回まで減少傾向にありました。12回までの減少は年末年始に近隣のカトリック教会による宿泊援護（ミサなどへの参加）の開始と04年8月から新宿地区での地域生活移行支援事業による大規模なアパートへの移行が開始されたことが原因だと思われます。

13回は若干ですが増加傾向にあります。カトリック教会での宿泊援護は今回も行われたそうですが、新宿地区での地域生活移行支援事業が05年2月でアパートへの移行を終了したことや事業実施後に公園への新規の定住（ブルーテントなど）が困難になったことで寝場所を求めてきたが残された公園のキャバに納まりきらない層と1次パトロールのコース周辺で通年的な排除にあった層が23時頃まで娯楽施設などで暖を取った後4号街路と地下広場に集中してきているのだと思われます。

過去5回の越年期第2次パトロールの平均人数の比較





■ 医療テントへの誘導

今回は前回より平均して気温が高く、日中の雨、雪などもない安定した天候でした（気温のデータは気象庁 HP <http://www.jma.go.jp/jma/index.html> より引用）。パトロール班からの医療テントへの誘導も3人と少なく、いずれも重篤な方はいらっしゃいませんでした。

傾向として、3人中1人は認知症の疑いがある70代の高齢者の男性、1人は精神的な疾患の疑われる中年の女性であり、いずれも他区でアパートで生活保護を受給している狭義のホームレスではない方でした。

帰れる家がありながらも冬の寒空の下まともな防寒着も着けず野宿をさせてしまう精神の病の恐ろしさやそれを許してしまう周囲の人間関係にこちらはお手上げでしたが、それでも本人さえ希望してくれれば（高齢者の男性は）医療テントで保護ができて、後日アパートに帰り、担当CWと医療班スタッフが今後の援助方針を検討することができました。

私たち支援団体が声をかけるまで幾人が彼の前を通り過ぎたのだらうと思いますが、路上に腰を下ろしていたり、横たわっている他人を「どうせホームレスだろ」とレッテルを貼ってしまうことで見て見ぬふりができてしまう心理を怖いと思う反面わからなくもなく、改めて「ホームレス」への支援活動の必要性を感じました。

■ 最後に

炊き出し班や医療班との連携のもと3部構成のスケジュールを無事消化できたのも日頃から参加・協力していただいているホームレス状態の方々やボランティアの方々、また越年期間中一日でも参加していただいた皆様のおかげだと思っております。今後ともご理解とご協力をお願いいたします。

以上

第13回越年での新宿駅周辺で出会った仲間の人数

* () 内は第12回的人数

	12/29 (金)	12/30 (土)	12/31 (日)	1/1 (月)	1/2 (火)	1/3 (水)
中央公園 コース	108	/	/	139	141	/
西口 コース	58	69	/	59	67	63
北口 コース	/	21	/	/	33	29
東口 コース	49	63	/	99	/	87
計	215	153	/	297	241	179
4号街路	74	80	71	84	83	91
地下広場	85	89	71	103	98	113
計	159 (114)	169 (157)	142 (123)	187 (198)	181 (159)	204 (185)
総計	374	322	/	484	422	383

今回の越年は、初めて新宿中央公園「水の広場」でおこないました。場所は変われど、医療班は例年のように医療テントを運営し、12月29日夜から1月4日朝まで6泊7日の活動をおこないました。

暖冬に恵まれた結果、風邪に苦しむ仲間は例年より少なく、心配されたノロウイルスの影響もほとんどありませんでした。疾病が重症化する仲間も例年より少なく、13回目の越年にして初めて救急入院の数がゼロになりました（救急搬送による受診は2件）。

しかし、医療テントのベッドが空いていたわけではなく、年末に病院を退院して、その後に体調が悪化した仲間や、アルコール依存症と内臓疾患をあわせ持つ仲間、居場所のない高齢者や精神疾患を抱える若者など、常に2名～4名を一時保護することになりました。

越年の活動をしていると、仕事がなくなり役所も閉まる年末年始にどのような人たちが路上に押し出されてくるかが見えてきますが、医療テントにいると、さらにその路上の中で、誰が一番弱い立場にあるかが見えてきます。今回、私は、医療テントに相談に来る人々の背後に、さまざまな人たちが流れ着き、労働市場や盛り場、住宅街など、さまざまな機能をあわせ持つ新宿という街の特性を見たような気がしました。

今後とも、この新宿という街の性格をふまえつつ、「路上死のない街」をめざした活動を続けていきたいと思っています。

*新宿連絡会医療班は昨年、10年間の活動記録をまとめた報告集を発行いたしました。1冊1000円で購入できます。ご希望の方は、メールshinjuku@tokyohomeless.comに購入部数、送付先をお書きになり、お申し込みください。

<2007年1月4日福祉行動報告>

越年中の医療相談で紹介状をもらった18名が新宿区福祉事務所を訪れ、以下のような結果になりました。

*入院（後日含む）3名

- 75歳男性 右上下肢不全麻痺、歩行困難
近隣区のアパートで生保受給中と判明
10日堀切中央病院入院
- 64歳男性 肝硬変、左膝痛
新大久保寮1泊、5日江東病院入院
- 60歳男性 左足化膿創、蜂か織炎
東京医大受診。12日東京医大入院

*通院と生活保護による施設入所 2名

- 61歳男性 肺炎（退院後）
東京医大受診→荻窪病院受診。施設入所（生保）
- 66歳男性 食道痛（治療中断）31日千代田寮緊急入所。施設入所（生保）。10日医療センター受診

*通院と法外宿泊 3名

- 39歳男性 脳梗塞左不全麻痺。血圧変動あり。
医療センター受診。新大久保寮（法外）
- 59歳男性 のどのつかえ、胃痛。医療センター受診。新大久保寮（法外）
- 48歳男性 バセドウ病。社会保険中央病院受診。
9日内分泌科受診。5日新大久保寮入所

*通院のみ 7名

- 30歳男性 アルコール依存症。松沢病院受診
- 53歳男性 胃潰瘍疑い。5日東京医大受診
- 42歳男性 手足末梢のしびれ、腰痛
5日東京医大受診
- 55歳男性 高血圧、耳鳴り、気管支炎
社会保険中央病院受診
- 58歳男性 高血圧、めまい。医療センター受診
- 57歳男性 視力低下。左眼視野に物が見える
新宿眼科受診
- 45歳男性 歯痛、歯周病。市川歯科受診

*その他 3名

- 55歳男性 痛風発作疑い、高血圧
本人が受診辞退。湿布のみ支給
- 77歳男性 疥癬、糖尿病。年金・貯金・国保あり
あそか病院受診（国保）
- 65歳男性 高血圧、眩暈症、狭心症。31日に聖母病院に救急入院して入院中と判明
5日に退院して生保手続き予定



とまりぎの衣類倉庫の様子

ボランティア募集中!

新宿炊出し (準備・片付け)

毎週日曜 午後6時より7時半

ところ 新宿中央公園ポケットパーク

池袋炊出し (準備・片付け)

第2、第4土曜 午後3時より5時

ところ 南池袋公園

医療相談会

第2日曜 午後7時より8時半

ところ 新宿中央公園ポケットパーク

第2日曜 午前10時より正午

ところ 戸山公園

パトロール (夜回り)

新宿駅周辺 毎日曜 午後7時半～

戸山公園 毎水曜 午後6時～

*お問い合わせ先

090-3818-3450 (笠井) もしくは、

メールshinjuku@tokyohomeless.com

新宿区「とまりぎ」気付の衣類カンパ、どうもありがとうございました。

送り先が二つもあり、混乱するとの声もありましたが、「とまりぎ」には多くの衣類カンパが届きました。連絡会の活動日以外でも多くの仲間への衣類の提供が可能となるようにとの判断でしたが、おかげさまでこの冬は十分すぎる程の衣類が集まり、うれしい悲鳴があがっております。「とまりぎ」では毎日、必要な仲間への衣類提供が行われています。そんな事もあり、一端、「とまりぎ」気付の衣類カンパ受付は中止させて頂きませんが、引き続き関ビルの方で衣類を受付ますので宜しくお願い致します。

新宿連絡会

2006年12月～2007年1月

会計報告

越冬活動への物品カンパ、現金カンパありがとうございました。

取入)		支出)	
炊出部門寄付	79,180	炊出し事業費	374,520
越冬部門寄付	1,206,843	パトロール事業費	2,515
通信部門寄付	16,000	教宣活動事業費	6,893
その他寄付	318,934	越冬事業費	656,981
事業収入	10,000	事務費	2,425
借入金	552,212	文化娯楽事業費	147,242
		池袋関連事業費	117,000
		雑費	7,100
		返済金	868,493
合計)	2,183,169	合計)	2,183,169

引き続き現金カンパ、物品カンパを宜しくお願い致します。新宿連絡会は皆様方からの寄付を一円たりとも無駄なく仲間のために使い切ります。越冬後段へのカンパは<http://www.gambanpo.net/>からも可能です。

●越冬カンパ、炊き出しカンパ 振込は、郵便振替口座00170-1-723682「新宿連絡会」まで。

オンラインカンパは、<http://www.gambanpo.net/>「ガンバNPO」(登録NPOを探すをクリックし新宿連絡会を見つけ、そこから寄付の協力をお願いに入ってください。)からだとジャパンネット銀行、クレジットカードで寄付が可能です。

●郵便物及びカンパ物品送付先が変更になりましたのでご注意を!●

★郵便物及び毛布、衣類、ホカロン、医薬品、米など衣類以外のカンパ物品は

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-6-10関ビル106号NPO新宿気付 新宿連絡会 宛て

(平日9時～5時で受取が可能です) お願いします。